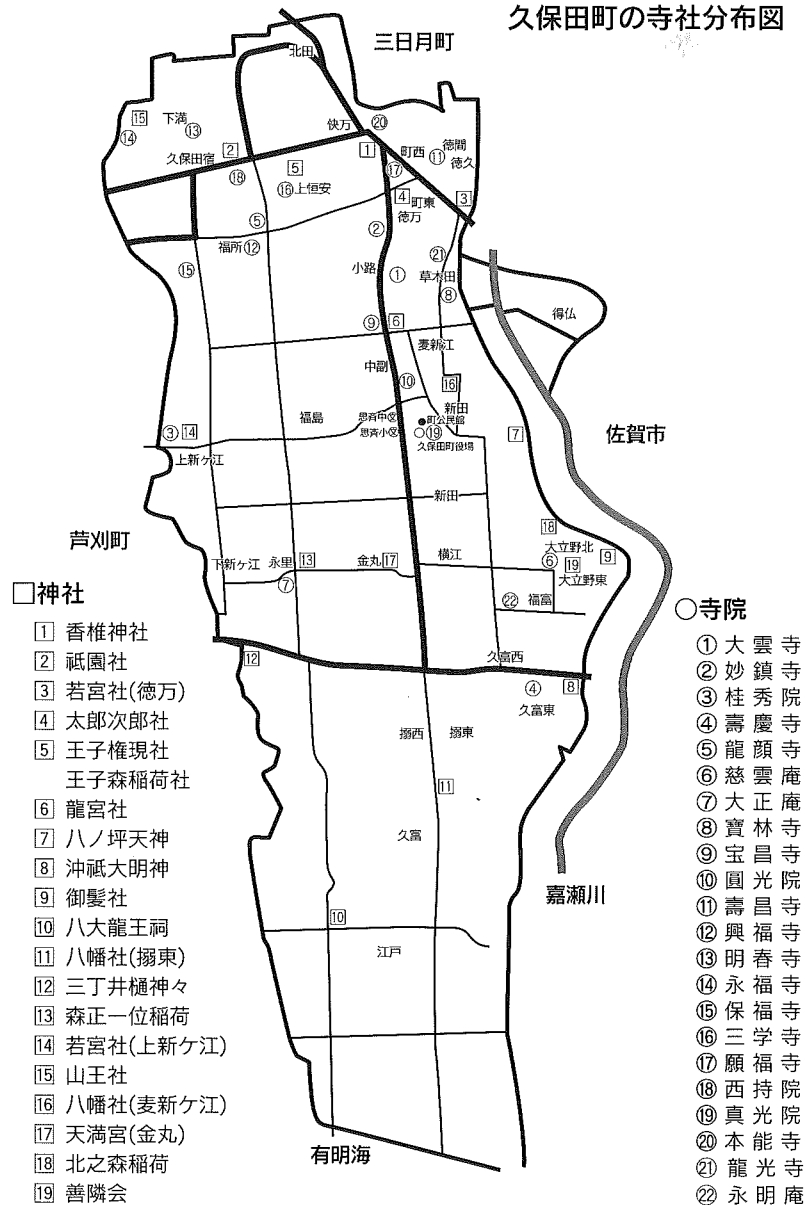


民俗



花嫁の道具運び風景 (昭和10年頃 搦東 大島トシ子氏提供)

久保田町の寺社分布図



概 説

「民俗」というのは、一般的には、民衆の習わしとか民間の風俗・習慣などという意味で用いられている。大きな事件や時代の節目の出来事は「歴史」の重要事項として記録されるが、その陰で変わりなく続けてこられた、ふつうの人々がどのように暮らし、生活を送ってきたのか、ということとはなかなか見えてこない。

私たちの祖父母・両親・そして私たちへと、世代を越えて伝えられ受け継がれてきた「伝承文化」がいまや消えてしまいそうになっている。機械化や合理化が進展するまでの、生活の基本となる衣食住・人が生まれ死ぬまで行われる通過儀礼・毎年繰り返される年中行事・心のより所であった諸々の民間信仰・生活の糧^{かた}をえる生業など、人々の生活と生産活動は先祖代々受け継がれてきた文化を主な内容としてきたのである。

民俗のなかで「ハレ」と「ケ」ということはがよく使用される。

私たちは毎日の生活を何となく過^{すご}しているようだが、そこには一定の周期のもとに繰り返し行われる何かがある。通常は生業に応じた労働を行う日々であるが、特別な行事が行われる日がある。特別な行事には、公的なものと私的なものがある。公的なものの多くは年中行事といわれるもので、毎年同じ日に先例にのっとり行われる正月や盆、寺社の祭礼などである。私的なものというのは、結婚式や葬式、年祝いなどが中心となつて行われる行事である。このような行事の行われる特別な日をハレ(晴)の日という。

ハレの日に対し、労働を行う通常の日をケという。漢字では「藝」という文字が当てられるが、この漢字は衣を執るという意味を示しており、日常の普通の精神をあらわしているといえよう。ハレの日は労働の日々であるケの日のあいだに、竹の節のようにはさまって、私たちの生活に一定のリズム感を与え、村落生活の秩序をささえてきたのである。

長い歴史の中で、第二次世界大戦後の生活の変化は、過去に類を見ない変化である。新しい技術によるさまざまなモノの出現は、生活の合理化・改善をうながし、全国的に均一化が進んだ。

そのような民俗の消滅あるいは衰退となった要因を社会変化の面からいくつか見てみよう。

・生業の多様化 以前は生業といえば農業、そして稲作が中心で、村落における作業や祈願、年中行事といったものも稲の生育に合わせて共同體として行われていた。しかし、生業が多様化し、機械化が進むことにより、かつてハレの意識を持つて行われていた村落共同體としての作業や年中行事・信仰などが消滅したり変化した。

・年齢別階層組織の崩壊 青年層の流出と少子化は、地域の行事の消滅に拍車をかけた。諸行事の中心をなす役割を担っていた青年たちが他所へ流出することにより行事そのものが続行できなくなった例がいくつもある。

また子どもたちの社会も大きく変容した。出生率の低下による子ども人数そのものの減少、さらに学校教育以外の塾や習い事により、ゆとりの時間がなくなり、子ども集団の縦社会がなくなった。

・個の重視 家の儀礼としての結婚、誕生、死などの冠婚葬祭が、家で行われていたころは地域の人々に見守られながら行われていた。しかし、地域の協力をうけて家で行われていたこれらの儀礼が、外の施設で行われるようになって地域とのつながりが希薄になってきた。

・物質文化の充足 家庭内の生活も大きく変化をした。台所などその変化が一番大きなところではなからうか。火と水が容易に手にはいるようになり、さらに台所用電化製品の普及で使いやすい台所となった。一方、火や水の有り難さが薄らぐと、火の神や水の神への信仰も遠のいた。

いまや、独自の風習・行事を求めることはむづかしくなったが、二二世紀の暮らしのなかに、意識して存続させていかなければならないものがあるのではないだろうか。

民俗編を記載するにあたって次のことをおことわりしておく。

・全ての集落で調査をすることを目的としたが、調査期間の関係上、時間的に不可能となり、偏った記述が見られるがご容赦を願いたい。

・民俗の記録は基本的に聞き取りのまま記載しているので、あいまいな表現や時代(時間)が前後した記述が見られるかも知れない。

・民俗特有の語彙ごいと思われるものは、カタカナで表記し、判明できるものは()内に標準語彙を記載した。

・相互に関連するものは、主と思われる項に記載し、()内に参照項を記載した。

・この編でとりあげた項目はできるだけ一般的なものであるが、地域により、家庭により内容等に違いがある。地名は旧村、大字、字と統一されていない。